

山形大学広報誌

みどり樹

Midori gi
Yamagata University Quarterly Magazine
vol.23 Spring 2005



特集 山形大学活性化プロジェクト
ザ・座談会

学部紹介 理学部

教員クローズアップ

Professor Close up

①医学部・②地域教育文化学部

山形大学
飯田キャンパス

夕りー夕 食

こんな美味しいおむすびは初めて

ZOOM IN PEOPLE

山形大学女子サッカー部

YAMADAI

NEWS

国際交流コーナー／学生コーナー

先生ほど「言葉」を解した人はいなかった…

故島村 盛助先生

地域へ飛び出してみよう 山形大学活性化プロジェクト

フロントランナーとして の山形大学SD

地域教育文化学部 教授 小田 隆治

今回で第2回となった中堅事務職員研修「山形大学活性化プロジェクト」とは、仙道学長が提唱する「ボトムアップに基づいたトップダウン」の試みの一つとしての職員研修(staff development=SD)システムです。第1回に引き続きディレクターとして参加しました私からその概要と狙いなどを紹介いたします。

これからの大連の存続や発展には、事務職員の企画・運営能力が欠かせないと考えから全国の大学に先んじるカタチで昨年度から始まった山形大学のSD。第1回は、山形大学の学内活性化に向けてさまざまなプロジェクトを立ち上げその多くは実施に至りました。どの大学も事務職員

に寄せる期待は大きく、山形大学のSDは走り始めると同時に全国の大学のフロントランナーとなったのです。

その誇りと不安を抱いての第2回は、「地域へ飛び出してみよう」のスローガンのもと、直接山形県内の市町村役場に出向き、そこの人たちと交渉しながらプロジェクトを創り上げていくことになりました。長い間、大

学は研究と教育をしていいと考えられてきましたが、最近になってそれに加えて社会連携ということが言われ出したのです。しかし、突然、社会連携と言われても私たちに何ができるのか、何が地域に役立つ

のかも定かではありませんでした。そこで、今回の研修生は地道に地域のニーズを聞いて回ることから始めたのです。前回の実績を踏まえてとはいっても研修生たちに新たな困難を突きつけることになった今回のプロジェクト。その奮闘ぶりを研修メンバーだったみなさんの後日談を通して垣間見てみましょう。



ザ・座談会



「超多忙な日々と引き替えに得た、素晴らしい出会いと体験」

第2回中堅事務職員研修「山形大学活性化プロジェクト」の参加者は24名。3人の職員で一つの班を作り、8つのプロジェクトチームでそれぞれの課題に挑んだ。SDセミナー説明会から発表会までわずか3ヶ月という短期決戦、しかも通常業務をこなしながらというハードな研修となつたが、参加者の多くは地域に飛び出しての活動に新鮮な感動を覚え、イキイキとしていたという。セミナーの締めくくりの発表会からおよそ3ヶ月後の2月初旬に参加者4人が久々に顔を合わせてセミナーについて語り合った。今だから話せる失敗談や苦労話も飛び出して、しばしSDセミナーの余韻に浸つた。

地域へと飛び出した、班名もユニークな8班の精鋭たち

発表会から3ヶ月ほど経ちますが、今日お集まりいただいたみなさんはどうなチームでどんなプロジェクトに取り組まれたのですか。8つのチームにはそれぞれユニークな班名がつけられていたとも聞いていますが。

鈴木 私は5班だったんですが、班名はメンバー3人の頭文字をとったSOTで「鮭まつりにおける『山形大学触れ合いコーナー』の設置」（鮭川村）に取り組み、一気に実施までしてしまいました。最初、7月のSDセミナー説明会で今回のプロジェクト内容を聞かされた時にこれからどうなるのかはまったく見当もつきませんでした。まずは、これまででも山形大学との結び付きがあった山形市、米沢市、鶴岡市、酒田市の四市を除くという条件のもとでの連携市町村の選定。これはメンバーの中の一人が鮭川村に親戚があり、身近に感じられるという理由ですんなり決まりました。早速、村役場に出向いて「村民の皆様のために何か役に立ちたいんです。」と担当者に話すと、村民のためという目的は役場職員が常に考えていることと合致するということで快く一緒に取り組んでいただけることになりました。

蜂屋 私は1班だったんですが、

「一般」という名称にしてその逆のいちばん一般的でない活動をしようというもくろみのもとスタートしました。私の場合、この研修自体の企画段階から関わっていたこともあってややフライング気味ではあったのですが、はじめから

ンバーや周りの班からヒンシュクを買う一幕もあって反省もありますが、一目散にやり遂げたことはよかったです。

鈴木 「自治体との連携」をキーワードにした今回のSD活動を受けて最上地域8市町村が動き出しましたからね。「最上地域に、ぜひ山形大学の機能を」と最上地域8市町村の教育長会から学長に要望書が提出されたり、SDの域をはるかに超えた大きな流れになってきました。

八島 工学部の職員3人でチームを組んだ私たちの班名は、ズバリ米澤藩。

米沢市以外の置賜エリアから連携市町村を選定するようにとの指示を受け、小国町か飯豊町まで絞り込み、最終的には、小中高一貫教育への取り組みや地理的な条件から新潟県側に目が向いていることなどを理由に、小国町に落ち着きました。私たちの企画プロジェクト「山形大学フェアin白い森の国おぐに」は、一般（1班）の「県内移動オープンキャンパス『一日山形大学』」と趣旨や方向性がほとんど同じということで、コラボレーション・プロジェクトとなり採択されました。

小山 メンバーを見てだれもが納得するコロコロ班の小山です。連携市町村の選定に当たっては、これまであまり山形大学との関わり



新庄市狙い。県内4ブロックのうち、唯一最上地区には山形大学の施設がなくて、そればかりか大学・短期大学という高等教育機関がまったくない「高等教育の空白地域」ということで、山形大学に期待するところは大きいに違いないと踏んだからです。その最上地区の中核都市である新庄市を他の班に取られたくないという思いでいち早く「新庄市！」と名乗りを上げて確保しました。プロジェクト名は、「県内移動オープンキャンパス『一日山形大学』」。班のこのプロジェクト企画をとりまとめると同時に、このSD全体を絶対に成功させなければという思いが強かったので、気合いの入り過ぎで他のメ

ザ・座談会



村民の皆様のために何か役に立ちたいんです。
「SOT」鈴木さん



大切なのは、いかに誠意をもって取り組むかと言うことです。
「コロコロ班」小山さん

がなかった所、よく知らない所を調査しようということになって、平成15年度YTSふるさとCM大賞最優秀賞の受賞が印象的だった大蔵村で全員の意見が一致。まずは、大蔵村にアポイントメントを取るために説明が大変と思ったら、大蔵村役場の担当者がこの研修のことを新聞で見て知っていてくれたので話はスムーズに進みました。大蔵村から具体的に提示された4つのニーズを検討して「大蔵村自然塾」として結実、平成17年度の実施可能プロジェクトとして採択されたので今後がまた楽しみです。

連携する市町村によってもその対応はまちまち、市町村選びが大きなカギになったという印象も受けます。

蜂屋 新庄市の対応も初めはかなりシビアでしたよ。最初は電話でのやりとりだったんですが、「新庄市も人員削減で、通常業務の他にお手伝いする余裕はないんですよ」と担当者。「具体的な構想は、できる限りこちらで対応します。新庄市の方々にはご相談にのっていただきたり、ご指摘いただきたいと考えています。」と食い下がる蜂屋といった感じでしたね。今回のプロジェクトの趣旨・概要をFAX送信して検討してもらった結果、「こういう内容であれば、結構ですよ。」という色よい返事をいただき、そこからは一気呵成です。私たちの班のプロジェクトは「新庄市」でなければ成立しない企画でしたから必死でしたね。

八島 小国町も最初のほうの対応はけっこう難しかったですね。最初は、私自身もまだ何をどうしていいかわからない状態での訪問となってしまったので、ホント向こうにしてみれば「何しに来たの?」ですよね。何の話も聞き出せなく

て、町のニーズを汲み上げるなんて到底できませんでした。それで、2回目の訪問の時には「オープンキャンパスの開催」といった具体的な提案をもっていったんです。こちらの話が具体的だと向こうからもいろんな声が返ってくるんですね。はじめてコミュニケーションが成立したっていう感じでした。町の対応云々ではなくてこちらの進め方の問題だったと思います。

小山 私たちの大蔵村は最初からすごく対応がよかったのでやりやすかったです。村から提示される課題や要望がとても具体的だったので事業内容としても取り組みやすかった方だと思います。

鈴木 鮎川村の役場にはメンバーの親戚がいて話を通してくれたのでアポイントメントをとる苦労とともに全くなく、担当の方からは「助役からも、村民の皆様のために山形大学と協力するように指示を受けていますので、よろしくお願いします。」といった温かいお言葉を頂戴し、終始スムーズで和やかでした。



いろんな話を聞くうちに自分の中のアイデアがどんどん膨らんでいくのがわかるんです。人との関わり合いの大切さというものを痛感しましたね。学内にいたのではなかなか味わえない感覚でした。



八島 自分がやろうと思わなければ何も動かない、変わらないということ。逆に言えば、自分がやればやるほど何かが動く、そんな醍醐味みたいなものを味わえたような気がします。

鈴木 私たちの班の場合、採択云々を待たずして実施してしまったんです。去年の10月24日（日）鮎まつり会場に「山形大学触れ合いコーナー」を設け、参加型の科学実験を実施したり、大学の研究成果が生かされた米パンや静電気を防止するクシを提供したりしました。米パンやクシは好評だったし、科学実験も大盛況、たくさんの笑顔に出会うことができました。私たちの班は、他の班と違って「まずやってみよう」という精神があって、実績を作つてからレベルアップしていくべきだと考えたのです。一気に実施まで行つてしまつたからこそ学べたこともたくさんあります。科学実験を実施するために理学部の栗山先生や学生に協力を依頼したり、学内の他の上司や同僚から様々な助言や協力をいただいたりと、今回の件で横つながりを肌で感じることができました。日頃デスクワークばかりで

研修を通して得られた直接的な成果と、間接的な成長と

研修活動の中で痛切に感じたこと、学んだことなどをお聞きしたいのですが。

蜂屋 まず新庄市のニーズを吸い上げるためにアンケートを実施したんですが、そのアンケートを依頼する際にもNPOの人とかいろんな人と話をする機会があって、

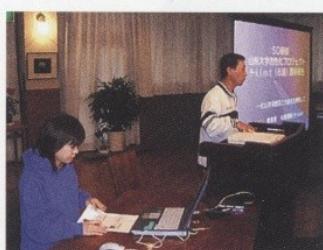


鈍った体にむち打って、テント張りなどの力仕事にも参加。現場のスタッフにもいろいろ教えられました。そんな苦労の甲斐あって当日々心地よい秋晴れに恵まれて大盛況。この研修のサポーターである本木監事とディレクターである小田教授も応援に駆けつけてくれて、とてもうれしかったし心強かったです。

小山 大蔵村の方々には本当によくしていただきました。SD報告書にメッセージを寄せて頂いたり、遠方にもかかわらず10月の発表会の時にはわざわざ見に来てくれたんです。すごく感激しましたね。それだけに、採択されるかどうかもわからない段階でこんなに先方を巻き込んでしまっていいんだろうかと申し訳ない気持ちになりました。

八島 そういう思いは私もありました。先方にも仕事があるのにって。

小山 小田教授にそのことを話したら、一般社会ではそんなことは当たり前と一蹴されてしましました。営業マンが一生懸命やったからといって必ず売れるわけではないし、ゴーサインが出るとも限らないということ。大切なのは、いかに誠意をもって取り組むかと言うことで、もしダメだった場合でも「またの機会に」と次につなげていく誠意こそが大切なことだ。その言葉を聞いてからは少し気がラクになりましたけどね。



みなさん連携市町村に何度も足を

運ばれたようですが、通常業務に支障をきたすようなことはありませんでしたか。

鈴木 もちろん、なかったといえば嘘になります。でも、研修ということで上司や同僚の協力が得られたので何とかやってこられました。私たちが地域連携のために学外へ飛び出していったことで学内の連携も深まっていたということも言えると思います。

小山 研修活動については、次から次へとやるべきことが迫ってくる感じで大変でしたね。ようやく終わったと安堵したのも束の間、今度は来年度の「大蔵村自然塾」の準備に追われています。



研修活動中のみなさんの様子をご覧になった周囲のみなさんの反応はどんな感じでしたか。

小山 いつもはほとんど学内でデスクワークですから、大蔵村に行く日は楽しみでしたね。たまにおみやげなんて買って帰るものだから、家族からは遊びに行ってるんじゃないかなって思われてたみたいですね。

鈴木 特別な反応ということはありませんでしたが、楽しそうにやってるという風には見られていたみたいですね。大変な思いをした分、あるいはそれ以上の楽しさがありましたからね。

蜂屋 みんなかなり楽しそうだったし、私自身も本務そっちのけで楽しんでいた部分もありました。「胸が躍る」という感覚も久々に味わいました。正々堂々と本務を

傍らに置いておいてこんなカタチで楽しめるのはSD参加者のみに与えられた特権ですよ。「こんなタフな研修、私はもう2度とゴメンです。」と報告書に記してしまったほどしんどかったですが、未経験者にはぜひ一度参加して実感してほしいですね。

それでは最後に、それぞれにご縁があって連携を深めてこられた各市町村への思いなどをお聞かせください。

小山 大蔵村は、温泉はあるし、そばや山菜はおいしいし、本当にいいところ。訪ねる回を重ねるごとに愛着が湧いて、テレビとかから「大蔵村」と聞こえてくると、「なに?」って反応するまでになりました。これから実施される「大蔵村自然塾」が楽しみです。

鈴木 私たちの研修活動は終了しましたが、これからが大切です。鮭川村の人々にとっては山形大学といえばSOTの顔を思い浮かべてくれる人もいると思うので、今後も鮭川村に対する相談窓口としての役割を継続していくと考えています。

八島 以前は行ったこともなかった小国町が、私の中では一気に「今、一番注目する町」に変わりました。中間報告では質問でしたが、今はみなさんへのお誘いの言葉として投げかけたいですね。「小国町に行ってみませんか?」と。

蜂屋 研修が始まる前から強い思い入れのあった「新庄市」、これからは山形大学がより身近な存在になってくれればうれしいですね。プロジェクトの企画メンバーがそのまま実施メンバーということではありませんが、言い出しちゃってはやはりずっと見守っていきたいし、関わってもいきたいですね。(終)



自分がやればやるほど何かが動く、そんな醍醐味みたいなものを味わえたような気がします。
「米澤藩」八島さん



「胸が躍る」という感覚も久々に味わいました。
「一般」蜂屋さん

学部紹介 理学部



理学部地球環境学科教授
(理学部地域貢献委員会 委員長)

齋藤 和男

あなたの隣に 山形大学理学部を —理学部地域貢献委員会—

山形大学の基本姿勢は、「教育」「研究」「地域貢献」の三本柱をバランスよく行ってゆくことといってよいだろう。これまで、理学部には「教育」に関する委員会はいくつもあったが、「研究」「地域貢献」に関する委員会はほとんどなかった。この紹介文では、「地域貢献」に焦点をあてて紹介しよう。

理学部に從来からある「地域貢献」に関連した委員会は「公開講座委員会」だけであった。理学部の「公開講座」は平成3年から始まり、平成16年度に第13回を迎えた。初期には文部省規定の料金を徴収して開いていたが、聴講者が減り、開催を見合わせる年も出て来たことから、聴講費を大幅に値下げし、高校生割引きも設け、開催も2日にした。近年は、「午後のサイエンス」というタイトルで開いているが、高校生のまとまった参加もあり、100名程度の受講者を集めている。年輩の固定的な参加者も増えているようである。「理学部公開講座委員会」を設け地道に対応してきた成果であろう。今回、この委員会を発展解消し、その実績の上に地域貢献委員会を発足させた。

最近は、高等学校からの「出前授業」の要請も多いし、理学部有志による「サマースクール」も平成16年夏から始まった。体験入学、理学部紹介といった、高校生を対象にした行事が増えている。理学部が主催する「環境防災展」では、ここ数年、高等学校の科学サークルの発表の場を設け、優秀な発表には理学部長賞を与えて表彰している。こうして数え上げると高校生を対象とした行事はずいぶん充実してきている。山形大学の学生が受けている授業と一緒に聴けるようにしようという試みも始まった。今年度から「トワイライト講座」と銘打って理学部の正規の授業「サイエンスセミナー」を一般公開している。理学部の学生よりも熱心にメモを取りながら聴講している高校生、一般市民の方を見ると、「この授業公開は成功だったな」と思う。（これは授業だから、地域貢献委員会の取扱い範囲ではないのだが、高校生、一般市民への公開ということでここで紹介した。）物理学科の柴田先生が中心になってNPO法人と共同運営している「やまがた天文台」も星空に憧れる人たちを引き付けている。山形で学会や研究会を開く時にあわせて一般市民対象の学術講演会を開催することも多い。

高校生、一般対象の行事はこのようにかなり充実しているが、高度技術者や民間研究者に新しい技術や知識を紹介する専門的な講座は少々手薄である。以前、社会人の再教育を目指した「リカレント講座」を開催した経験はあるがここ数年開かれていない。中学高校の現職教員の再教育講座は時に応じて開いて来た。実績がないわけではないが、高校生、一般市民に対する行事と比較すると手薄という感じは免れない。今後は、技術者、民間研究者を対象にするような講座等の充実もはかりたい。その第一歩として、平成17年度の公開講座は、理学部ではなく理工学研究科主催の講座を計画している。

理学部地域貢献委員会の当面の目標は、これらの活動をもっと有機的に関連づけ、市民の皆様が参加しやすい体制づくりをすることである。ともかく一度、なにかの機会を見つけて、理学部に遊びに来て下さい。日に日に新たな発展を見せる最先端の科学をちょっと覗けるかもしれません。



サイエンスサマースクールの物理実験



環境防災展での高校生の研究発表

Professor Close up 1

医学部医学科器官機能統御学講座
腫瘍分子医科学分野教授

北中 千史



そこから学べること ひとりでに消える「がん」 ～その「からくり」と

自然治癒するがんの謎

みなさんは自然に治るがんがあることをご存知ですか? 何も治療しないのにがんの塊が「あとかたもなく」消えてしまうのです。子供のお腹にできる「神経芽腫」はこのような自然治癒が最もおきやすいがんですが、「がんがひとりでに消える」こと自体不思議ですし、その「からくり」がわかれればきっとがんの治療に役立つことは誰しも想像するところです。そこでこれまで多くの研究者がその「謎解き」に挑んできました。

迷宮入り難問

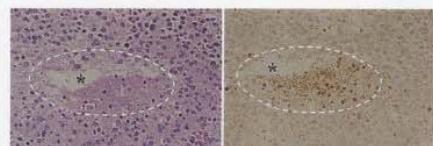
がんの自然消滅は免疫細胞による「他殺」かがん細胞の「自殺」が原因と考えられますが、神経芽腫の場合は他殺の証拠がなく自殺であると予想されました。つい最近まで細胞の自殺は「アポトーシス」という死に方でおきることが「常識中の常識」だったため、多くの研究者は「アポトーシス」から自殺のトリックをあかそうとしました。ところがどうしてもうまくいかず、結局この問題は迷宮入りとなります。

常識破りのトリック

一方私たちは「ras」と呼ばれるがん遺伝子が強くはたらくと細胞がこれを感知して「アポトーシスと違う」自殺をおこすことを試験管の中で見つけていました。そして「このような細胞自殺は身体の中でもおきていてrasによる細胞のがん化・悪性化を防ぐなど大切な働きをしている」と予言しました。ただ、このような考えは当時の「アポトーシスの常識」からはかけ離れていたため容易に受け入れてもらえません。そんなとき私たちは「神経芽腫自然消滅の謎」に気付き、その解明に取り組みました。その結果、神経芽腫ではがんが大きくなってからrasがはたらき始めることがしばしばあるのですが、このrasが「アポトーシスとは別種の自殺を引きおこすことによって」がん細胞が消えてなくなることを突き止めました(図はrasをたくさん作っているがん細胞が自殺をおこして消えてゆくところを示しています)。「アポトーシス」で謎が解けなかったのも無理ありません。

なにが学べるか?

さて、今回ご紹介した「がん自然消滅のからくり」から学べることは少なくとも二つあります。一つは「常識」が問題解決をかえって難しくしている場合があるということです。だからこそ常識にとらわれない柔軟な発想と強固な信念が科学の飛躍的進歩にはとても大切です。もう一つの点ですが、細胞自殺はがんの予防に大切な役割をもつていて、細胞が「がん遺伝子の活動を感じて」企てた自殺が「未遂」に終わるとその細胞はがんへの道をひた走ることになります。例えがんの中でも特に治療の難しい肺がんではrasが強くはたらいていますが、うまく自殺を免れています。そこで私たちはいま「自殺のからくり」に学びながら肺がん細胞が「自殺しないからくり」を明らかにしつつあります。そして今後はこのからくりを逆手にとって肺がん細胞に自殺してもらう治療法を開発しようと考えています。医学研究はこんなふうにスリルがあってしかも役に立つともやり甲斐のある仕事です。このような経験をひとりでも多くの人と共有できるといいな、と思っています。



(左) 神経芽腫の断面の様子。点線の外側にたくさん見られる「紫色の豆粒」が生きているがん細胞。点線の内側ではがん細胞が(アポトーシスと違った)自殺をおこしているため豆粒の数が激減している。星印(*)の部分は死んだがん細胞が吸収されてできた空間。(右) 左と同じ断面でrasの量をしらべたもの。rasをたくさん作って(=濃い茶色に見える)自殺したがん細胞の残がいが点線内に数多く見られる。自然に治る神経芽腫ではこのような景色ががんのあちこちに出現していく。

Professor Close up ②

地域教育文化学部地域教育学科講師

足立 幸子



国際的に子どもの読書を考える

最近、子どもの読書が問題になっています。経済協力開発機構が2003年に実施した国際学習到達度調査では、我が国の子どもの読解力が41カ国中14位になって学力低下だというニュースが流れました。しかし、私の関心はむしろ、41カ国の人々が共通に読解力について考えたというところにあります。今や、子どもの読書は、世界規模で考えなければならない問題です。

私は、読書教育を研究テーマにしていますが、最近では、国際的に仕事をすることが増えてきました。昨年にはアメリカに、一昨年にはスペインに滞在して、米・西の子どもの本を勉強しました。

滞在中感じたのは、子どもの本に描かれている子どもたちの心の有り様の違いです。ある悩みを抱えた場面で説明してみましょう。日本では、主人公の気持ちは内省的に丁寧に内側から描かれます。スペインの主人公は、まるでドン・キホーテのように、くよくよせずに突き進んでいきます。アメリカの本では、ドライに主人公の置かれた状況が記されます。また、子どもの本はその国が抱える問題を浮き彫りにします。例えば、アメリカの子どもの本には、黒人問題に取り組んだ人たちや、両親の離婚後自分の居場所をみつけようとする子どもや、移民てきて苦労しながらも壁を乗り越えていく家族の姿が、生き生きと記されています。こういうものを読んで、本当にその国や人々が抱えている状況をより深く理解することができました。

子どもは単純に楽しくて読書をしますが、同時に無意識にその本に描かれている外国のことを学んでもいます。例えば、私が小学生の時に読んだドイツの『大どろぼうホツツェンプロツツ』では、ゼッペルという男の子が魔法使いに捕まってしまいます。そこで彼がしなければならない仕事は、魔法使いが魔法でできない大量のじゃがいもの皮むきでした。ドイツではじゃがいもがよく食べられており、そこの子どももきっとよくじゃがいもの皮むきを手伝わされるのだろうと思いました。ザワークラフトやプラムケーキもこの本で初めて知りました。いや、食べ物ばかりではなく、泥棒の隠れ家がある黒い森の印象も、ドイツの印象として私の心の中に深く刻まれました。つまり、子どもは、読書から、世界中の国の食習慣、環境、人間関係などを学んでいくのです。

子どもの本はまた、世界共通の宝物でもあります。子どもの頃に読んだ同じ本について外国人と語り合うと、まるでその人が旧友であったかのような親しみを感じます。子ども時代の読書は、人類の共通の土俵でもあるのです。様々なメディアによって、世界的に情報が共有される時代だからこそ、国際的に子どもの読書を考えることが大切なのではないでしょうか。

私の研究室では、このように国際的に子どもの読書を考える視点から、外国人研究者との読書教育の共同研究に取り組んでいます。



子どもの本は世界共通の宝物

シリーズ

食

Vol.12

こんな美味しいおむすびは初めて

人文学部総合政策科学科助教授
富田 かおる



米 国料理は地域色が優勢で、誰もが認めるような共通の味がないと言われています。ロブスター、クラムチャウダー、茹でたポテトとコーンというニューイングランド風の食事を楽しむことができれば、多種多様な民族の料理を試すこともでき、また、ファーストフードチェーン店の片隅に自分の場所を見つけることができます。

コネチカット州ニューーヘンプトンに暮らす機会を得、その間通った研究所の向かいに1895年からハンバーガーを売っているルイス・ランチがありました。ステーキの切り落とし肉を、ひき肉にして固めて焼いたのが始まりで、調理法はお客様のドイツ人から教えられたそうです。現在4代目が店を引き継ぎ、毎日使う分だけの肉を挽肉機で挽き、手で丸め、ゆっくり焼き上げトーストしたパンに挟み出してくれます。100年以上続く、お昼の短い時間だけ営業の老舗では、店の前のたつひとつベンチにすわり美味しいそうにハンバーガーをほおばる人をよく見かけました。

ファーストフード産業により馴染みの食べ物になった食品の多くは、アフリカ系、イタリア系、メキシコ系等の移民により調理法が導入されたものですが、巨大企業の大量生産や規格化、加工食品がもたらす食品の画一化の影響をもろにうけ、その

民族の味を喪失してしまったとも言われています。しかし、お手軽な加工食品に美味しいと思わず声を上げてしまう事もあります。

SPAMと書かれたプリキの缶から中身を取り出し、B級地元料理と言われるスパムむすびを作ってみました。四角い缶に入った調理済み塩味豚挽肉をそのまま取り出し、薄く切り、胡麻油で軽く焼き、ご飯をのせ、細い海苔で巻いて出来上がり。ハワイ州では日系・中国系移民が現地でアジア必須食材の生産を推進し、大量の米が生産されるようになりました。そんな土地でできた即席食品を使ったスパムむすびは口コモコと並ぶ人気食品です。

ハワイ語でPUPU、おつまみという意味の題目の料理本を買って帰り、他のスパム料理も作ってみました。スパム、椎茸、胡桃、海老、葱を刻み、卵と混ぜてワンタンの皮でくるみ、油で揚げて作るスパムワンタン。とても美味しい。初めて食べたのは、アメリカ人の友人が作ってくれたスパムむすびを食べた時でした。いつしょに居た南アフリカの親子もとても美味しいとたくさん食べていました。

一口食べて、あっと驚くほどの忘れられない美味しさ。友人の優しさが嬉しかったのか、景色に酔っていたのか、味に感激していたのかはよく覚えていませんが。缶を開け、ざっくり切って、焼き、ごはんにのせて、海苔で巻く。スパムむすびはこれからも何度も作ろうと思っています。しかし、ワイキキビーチの美しい夕日を眺めながらかじるスパムむすびはやはり最高でした。



ワイキキビーチの夕日



可憐にパワフルに咲く、 山大なでしこイレブン。

アテネオリンピックで一躍脚光を浴びた日本の女子サッカー。実は山形大学にも女子サッカーチームがあり、これが知る人ぞ知る、けっこう強くて全国的に活躍しているのです。浅井助教授率いる「山形大学女子サッカーチーム」は、創部16年というからJリーグよりも歴史あるチームということになります。創部当初から監督を務めている浅井先生の熱心な指導の甲斐あって、昨年の山形地区女子サッカー選手権大会優勝、全日本大学女子サッカー選手権東北大会優勝、全日本大学女子サッカー選手権ベスト16、国体の県選抜チームに9選手を送り出すなど(平成16年度さいたま国体ではベスト8)、華々しい活躍を見せています。

現在、部員は19名。キャプテンの白石幸子さんをはじめ部員全員が中学や高校時代からサッカーチームでがんばってきた女子たち。白石さんに至っては高校も大学も女子サッカーチームの存在がいちばんの志望動機になったとか。全日本大学女子サッカー選手権の本大会出場チーム枠はわずか16、その中でも国立大学は3~4校というかなりの希少価値。サッカーブレーが大好きな女

子大生が県内外から集まったわけですから自ずと練習熱心にもなるというもの。夕暮れのグラウンドではボールが見えなくなるギリギリまで走り回る部員たちの姿が見られます。それでもまだまだ練習し足りないようで「夜間照明があれば、もっともっと練習できるのに。」と大学への照明機器の設置を求めるアピールを続けています。

グラウンドで果敢にボールを追いかける姿は十分に力強いのですが、それでも監督に言わせると「技術的にはかなりレベルアップしてきてはいるが、まだまだおとなしいし声出しもハングリーさも足りないね」と手厳しい。さらに、「おっとりしたなかよしチームになりかねない」と心配するほどのチームワークの良さがこのチームの強みであることも確かのようです。男子中高校生チーム相手の練習試合、年下とはいえ男子のパワーや技術には学ぶべきことが多いといった謙虚。今後のさらなる活躍が期待できそうです。これを機にサッカーを愛する女子大生たちに熱い視線と声援が集まってくれることを願っています。

ミャンマー連邦に農業技術支援
(農学部)

生産性の向上が期待されるミャンマーの農地



様々な農業技術が活かされている山形県の稲作

地域との連携を通じ、農学技術を活用した国際貢献に取り組んでいく意欲を見せて いる山形大学農学部では、平成17年度から3年間、ミャンマー連邦に対して専門家の派遣、研修員の受け入れ、現地指導者の育成、農家の組織化と技術指導などを柱とする農業技術支援を行うこととなりました。

これは、農学部が所在する鶴岡市が、粕渕辰昭農学部長、安藤豊農学部教授等と協力して、独立行政法人国際協力機構に対し、「平成17年度草の根技術協力事業」として申請したものが、ミャンマー国稻作技術普及事業として予算化されたものです。

同国においては、基幹産業である農業の就労人口が全体の6割を超えており、特に主食たる米については、食料安全保障や社会・経済の安定のために極めて重要な役割を果たしていますが、生産財の不足や栽培技術・収穫後処理技術等の問題により、収穫量は、庄内地域の半分以下という低収量・低品質となっています。

そこで、農学部と鶴岡市の連携により、庄内地域の有する稲作技術や経験の蓄積を活かし、同国の農業技術者や農業普及員を対象として、施肥技術を中心とした適切な稲栽培体系、収穫・調整技術の技

術指導を行うとともに、展示圃の整備や農民組織の確立を通じた技術の普及を図り、収穫量の増産と高品質化、農民の生計向上に寄与していきたいとしています。

折しもスマトラ島沖地震による津波等の被災状況も懸念される中、農学部では、この支援活動が同国の活性化の一助になることを願うとともに、山形県の幅広い稲作技術が世界に発信され、普及されていけばと考えています。

第17回留学生日本語スピーチ
コンテスト開催

山形県内に在住する外国人留学生を対象にした日本語スピーチコンテストが、12月5日(日)に山形テレビ・スタジオで開催されました。

このコンテストは、留学生の日本語習得の動機付けと、留学生と県民の国際交流の輪を広げることを目的に、山形経済同友会、山形ロータリークラブ、国際コミュニケーション・レディズクラブ、山形テレビ及び山形県留学生交流推進協議会の共催により開催されたもので、県内の大学や短大、専門学校で学ぶ6ヵ国、21名の留学生及び研修生が出場し、国際交流、環境問題、日本の良さなどについて意見発表を行いました。

スピーチ終了後には審査員による審査が行われ、その結果、6名の留学生が山形県知事賞、山形経済同友会賞、山形ロータリークラブ賞、国際コミュニケーション・レディズクラブ賞、山形テレビ賞及び審査員特別賞の各賞に輝きましたが、そのうち、山形学からは3名の留学生が山形経済同友会賞などを受賞し、喜びを顕わしていました。



参加者による記念撮影

先生ほど「言葉」を解した人はいなかった…

英文学者
故 島村 盛助 先生

盛助肖像
山形高校教授のころ



われらここに聚ふ　わがまなびやは
ひいでたる山のすがた　にごらざる水のながれ
たぐひなし　ああわがまなびや　われらここに聚ふ

山形高等学校校歌を作詩した英文学者、島村盛助先生の事績に、いま光があでられています。

平成15年11月14日から12月7日まで、故郷の埼玉県宮代町郷土資料館で開催された「島村盛助特別展」は、同館開設以来の大盛況で図録もあつという間に完売し、期間も21日まで延期し、約3千人が来館したと、『朝日新聞』(平成15年12月21日付東埼玉版)が報じています。

夏目漱石の門下生で、岩波書店初の語学辞典『岩波英和辞典』の編さんや『失楽園』(ミントン作)の翻訳で知られ、明治から昭和にかけて活躍した盛助を、郷土が生んだ偉人として、地域の人々が認識したものです。

南埼玉郡百間村(現在の宮代町)に、江戸時代から名主を代々勤めた旧家の長男として、盛助は明治17年8月に生まれました。曾祖父・祖父は俳句に通じ、父は剣道の達人で、百間村長として小学校校舎を私財で新築しました。

このような環境に生をうけた盛助は、旧制第一高等学校で漱石の薰陶をうけ、東京帝国大学文科大学英文科に入学して、『帝國文学』に翻訳「精神の眼」(喜劇)二幕目を発表し、このうちに夢三のペンネームを用いるようになります。明治42年同大学を卒業し、以後『帝國文学』『ホトギス』雑誌『スバル』等に翻訳や小説を発表し、作家活動をします。

志賀直哉は明治44年1月1日の日記に、「夜昨日から読み出したホトギス新年号の島村夢三の大木を読了。かういふ小説を書く根気は自分にはない、読む根気が漸くだ」と記しています。4月28日から6月6日まで、『読売新聞』紙上に小説「貝殻」を連載し、また、高村光太郎、北原白秋、森田草平、鈴木三重吉などと交遊を深めました。

下野中学校、埼玉中学校の教諭をへて、大正9年7月、この時新設された旧制山形高等学校教授に任せられ、妻子とともに山形に移り、8月2日の開校を迎えます。

夫妻は、この地の風土、人情に愛情を深め、子供達を山形の学校に入れ、24年間の山形生活を送ります。

山形大学附属図書館に収蔵されている『山形高校校友会雄志』には、新島守や夢三の筆名での隨筆や、同僚岡本信二郎(迦生)、深町弘三(弘艸)とはじめた俳詠連句の多くの両吟、三吟の「歌仙」が残っています。これら教授と生徒達の文芸活動は、当時の山形に大きな影響を与えました。

『校友会雑誌』第24号から第36号までに、6回にわたって掲載されたエドウイン、アーノルド著『亞細亞の光』の翻訳は、昭和15年に岩波文庫として発刊されましたが、複雑な佛教用語を含む翻訳を文語調で行っています。

岩波茂雄の依頼をうけて、昭和5年に、同僚田中菊雄と共にはじめた英和辞典の編さんは、それまでの辞書が、ひとつの言葉をよく使われる意味順に解説を配置しているのに対し、盛助は「語義は変遷発達の跡をたどって」とし、複数の意味を持つ場合に、それは時の経過とともに変化していると考え、歴史的に最初に使われた意

4男達彦と中学同期生・山形銀行元常務 設樂 隆

味を先頭に配置し、時代を追った順に意味を並べるという、画期的な方式で、7年の努力をへて昭和11年4月に刊行し、増版を続けました。

盛助は、昭和15年8月には勅任官をもって遇され、19年7月に願いに依り本官を免ぜられ、従三位に任せられて、山形を去り郷里に戻りました。

昭和22年にミルトン『失楽園』の訳業に着手します。盛助の翻訳は、言葉的確さと美しさにその特徴があるといわれていますが、『失楽園』も格調高い気品にあふれた文語調で、昭和26年7月に訳了し、これが翻訳での絶筆となります。25年4月から、母校の旧制第一高等学校に出講していましたが、26年10月に健康すぐれず退職し、27年4月に自宅で病歿(享年67)しました。

『失楽園』は、山形高校時代の教え子の努力により、「編集・島村教授遺著刊行会、日本ミルトン・センター」として、昭和57年に出版されました。その「あとがき」に、「英語英文学を徹底的に味わい楽しむ、その奥ゆかしい風格は、正に脱帽して敬意を表すべきものと思ふ」と記されています。

「英学者としての仕事のほかに、作家としても才能を發揮した盛助の足跡を完全にたどるには、まだ、ほど遠いので、町としても資料収集を本格的に始め、特別展を盛助研究の第一歩としたい」と郷土資料館では述べています。



「岩波英和辞典」



「失楽園」



「山形高校校友会雑誌」

盛助滞英作品
「ユニバーシティーパーク」
(大正12年)



達彦作品「セロリなど」
(昭和61年)



盛助は絵の才にも恵まれていました。子供達は、男女ともに学問の分野に進みましたが、山形で生まれた4男達彦は、父の血筋の一面をひいて、山形中学を卒え、「好きな道を歩め」という父の理解をえて多摩美術学校に進んで洋画家になりました。山形高校第1回の卒業生で高名な美術評論家である今泉篤男は、「達彦君は私の山高在学中に生まれた子だから、毎日のように島村先生のお宅に入り浸っていた私は、彼の赤ん坊の時から識っている。

それが多摩美術学校を出て突然私のところに見えた。私は達彦君が画家になっていることなど全く知らなかったのである。何か不思議な因縁の糸のようなものを感じて、その後私はこの画家に接してきた」と述べています。

達彦は妻とともにパリに住み、長い苦闘と精進を続け、山形でも個展をしました。今泉は「山形の個展でのレセプションのときに、達彦君は山形の皆さんの中で、『私は山形に生まれてよかったです。』とひとこと言っただけで絶句した。この画家特有の素朴と高雅さの溶け合った作品、島村君のような純粋な画家が、孤独にコツコツと自分のペースを崩さず制作を続けていることを、私は日本のこれからの洋画壇のために、心ひそかに喜んでいる(昭和54年)」とも述べています。

活躍を続けた達彦は平成16年2月に82歳で急逝しました。

4月11日(月)から28日(金)まで、山形市七日町・山形銀行「さくらんぼギャラリー」で達彦追悼展を開催し、その会場には盛助先生の資料も展示いたします。ご高覧いただければ幸甚に存じます。

Event Information

平成17年4月から6月まで

平成17年度 山形大学入学式

■日 時 平成17年4月8日(金) 10時30分~

■場 所 山形市 山形県体育馆

※式終了後、たかは共生塾塾長 星 寛治氏による講演会を予定しています。

公開講座等

テーマ 椿 貞雄「菊子遊戯の図」を探る 「山大文化財リサーチ・プロジェクト」の成果報告(附属博物館)

「山大文化財リサーチ・プロジェクト」にて油彩画の科学的調査を行った結果、椿貞雄作《菊子遊戯の図》の下絵が目に見える人物の表情とは明らかに異なることが判明しました。その調査結果をインフォメーションセンターにて展示報告します。



■期 間
5月16日(月)～5月27日(金)
(土・日を除く10日間)
■場 所
山形市 小白川キャンパス内 インフォメーションセンター
■募集人員等 一般の方

テーマ 「健康と長生きの先端科学」(理学部)

大学院理工学研究科地球共生圈科学専攻が主体となり、本学及び山形県下の大学、研究所の先端研究者を講師に迎え「健康(病気)」「長生き(死)」について「抗酸化(生物ラジカル)」をキーワードとしたそれらのメカニズムの最新の研究成果を紹介・解説し、実生活に結びつく事例をあげながら講義します。

■期 間 6月11日(土)、6月18日(土)、6月25日(土)の3日間
■場 所 山形市 理学部先端科学実験棟大講義室
■募集人員等 100名(一般の方、大学生、高校生)

テーマ 五感で感じる農業(農学部)

生産生態制御学講座の生物系3分野の研究内容を学生ホールに展示し、参加者に実際見て、触って、嗅いで、味わってもらいたいそれを知っていただき、場合によつては実験も行います。

■期 間 6月11日(土)、6月18日(土)、6月25日(土)
計3回(12時間)
■場 所 鶴岡市 農学部 学生ホール
■募集人員等 30名(小学生から大人まで)

編集後記 Editor's Note

今回の特集とZOOM IN PEOPLEは試験的に外部のライターによる取材形式が採り入れられています。いずれこうした方式が主流になりそうです。おカタイなどで知られた国立大学(法人)の広報誌等にも、最近では「見せる」、「読ませる」ことを主眼に据えた作りのものが増えて来ました。これも時代の趨勢でしょうか。本号は従来の教員による投稿形式を残した最後の「みどり樹」となるかも知れません。

春は別れと出会いの季節です。キャンパスを後にする者もあれば、また新しい顔を迎えます。晴れの門出に幸多かれ。新しき出会いの実り豊かならんことを。

広報委員会委員 相沢 直樹

農学部附属演習林入山式

■日 時 平成17年5月6日(金) 11時~

■場 所 東田川郡朝日村 農学部附属演習林

※大正5年5月6日に祠を建立し入山者の安全を祈願したのが始まりです。

お問い合わせは、文書広報係まで(023-628-4008 or 4039)

テーマ 「大教養人をどう育てるか -地域教育文化学部と草木塔精神-」 (地域教育文化学部)

新生の地域教育文化学部は、21世紀の山形県の教師像である大教養人をどう育てるか、について考えます。

■期 間 6月10日(金)～7月15日(金)
毎週金曜日(6月24日(金)は休み) 計5回(10時間)
■場 所 山形市 地域教育文化学部C1教室
■募集人員等 30人(一般の方)

テーマ 親子で考えるための理科教室 (地域教育文化学部)



小学校の教科書で取り扱われている内容から、物理、化学、生物、地学領域の実験を取り上げ、お父さん、お母さんが子どもと一緒に実験・観察、さらには「どうしてそうなるのか?」について理論の構築をするなど、科学の方法を体験してもらいます。その結果として、家族団らんの折りなどに子どもと一緒に、日常生活で普通にみられる現象を「どうして。不思議だな。」という視点で考えたり、調べたりするといった科学の話題で弾む家庭環境をつくるお手伝いができると考へています。

■期 間 6月～7月の土曜日(隔週)計5回(10時間)
■場 所 山形市 地域教育文化学部 第3共通演習室
■募集人員等 親子20組

- この「みどり樹」は下記URLからもご覧になれます。
<http://www.yamagata-u.ac.jp/html/kouhoushi.html>
- 「みどり樹」は、3月、6月、9月、12月に発行する予定です。
- 「みどり樹」に対するご意見・ご質問等を、お気軽にお寄せください。
おことわり:この「みどり樹」は3月発行となっておりますが、お手元に届くのが4月になることを想定して、「教育学部」の名称表記を4月1日改組後の「地域教育文化学部」とさせていただきました。

——地域に根ざし、世界を目指す——

 山形大学
Yamagata University

山形大学ホームページ <http://www.yamagata-u.ac.jp/index-j.html>

 大豆インキを
SOYINK 使用しています

R100

吉紙配合率100%再生紙を
使用しています